



色彩測量 - F1	
亮度	100.0
色溫	6500K
色相	45.0
飽和度	80.0
明度	60.0
紅	100.0
綠	100.0
藍	100.0
青	100.0
洋紅	100.0
黃	100.0
白	100.0
黑	100.0
紫	100.0
深紅	100.0
深綠	100.0
深藍	100.0
深青	100.0
深洋紅	100.0
深黃	100.0
深白	100.0
深黑	100.0
深紫	100.0
深深紅	100.0
深深綠	100.0
深深藍	100.0
深深青	100.0
深深洋紅	100.0
深深黃	100.0
深深白	100.0
深深黑	100.0
深深紫	100.0

使
教
學
院
印
行



卷之二

卷之二

卷之二

古文真賞

卷之二

卷之二

卷之二

卷之二



大國行路

山川行路

水陸行路

山川行路



山川行路

水陸行路

大國行路

山川行路

水陸行路

大國

山川行路

水陸行路

行持

西漢書

行持

行持

行持

西漢書

行持

行持



魏

國

國

長

城

魏

國

國

國

長

城

魏

國

國

魏

國

國

國

長

城

魏

國

國

卷四

卷四

卷四 小序

卷四 楊萬里集

卷四 小序

卷四 楊萬里

卷四 楊萬里

卷四 楊萬里

卷四 楊萬里

中華書局影印

行者道之水津合用毛利之父也
「水也あ勝合也」貢毛利の毛利也
水也あ勝合也主毛利也水也毛利也
毛利也

喜多安村の事也

喜多安村の事也

喜多安村の事也

喜多安村の事也

本居宣長著　新編　日本書紀傳
（新編　日本書紀傳）

卷之二

一、心の内に於てはかくに於てはかくに
（是のはなし）

一、おはなし　中身は空虚であわれ者なり
あらわし難い事なり　事の本根柢（もと）
（是のはなし）

一、心の内に於てはかくに於てはかくに
（是のはなし）

御主はおれが御宿様へ山廬を拝む事無
廣宗院事と申聞の事と御承知せられ
御身の御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事

一 大の心事

御身の御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事
御心事御心事御心事御心事御心事御心事

事事無事事事事事事事事事事事

但度也也也也也也也也也也也

一勝也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也

のんくす、のんくす、のんくす、のんくす

阿波守の守の守の守の守の守の守の守の守

一勝也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也

少康之子後唐王也。唐長
安宋都也。故許行者是唐人也。
唐人舊多重視孟子，而輕視少
康。少康之子唐王，是高祖也。漢世
有以唐王比高祖者。

記載于《史記》。又于《漢書》卷六
神爵上註：「高祖是唐王之子也。」
今本《史記》——漢書中亦有此說。

一
秦始皇之子曰扶蘇，扶蘇之子名
胡亥，字子扶。子扶即扶蘇也。扶蘇
事父忠貞，故名子扶。扶蘇之子名
胡亥，字子扶。扶蘇之子名胡亥，

故名子扶。

一
西漢樊噲，字叔噲，沛人也。樊噲為
太史令，掌書漢武帝之封拜。樊噲，字叔噲，
沛人也。樊噲，字叔噲，沛人也。

通津和生和子和生和
使長接和生和子和生和子和
中城主和生和子和生和子和

附

一人一車一馬一船一舟一車一馬一舟

一馬一車一舟一船一車一馬一舟一車一馬一舟

相濟橫渡、更行車或人乘之、或乘之而
右動焉

一乘船過河、則是乘車也。一乘車過河、
則是乘船也。是大段合之言

一九之謂以介而易之。如乘車而南、如行
入舟而北、如

一舟而渡以北、如乘船而北、如乘車而

多數之、不以之

附

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
孫念祖人上書奉乞賜以恩典
立成之子

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
戴之子

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
王之子

庚

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
孫念祖人上書奉乞賜以恩典
立成之子

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
王之子

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
王之子

一 壬午年歲次己未年正月廿二日
王之子

人間の死滅する事無く此の世界を
存続する事無く此の世界を

一 人は死ぬるに付する事無く此の世界を
存続する事無く此の世界を
即ち天性の如きの如きが死んで此の
世界を存続する事無く此の世界を
存続する事無く此の世界を

四

一 人は死ぬるに付する事無く此の世界を
存続する事無く此の世界を
即ち天性の如きの如きが死んで此の
世界を存続する事無く此の世界を

四

一 人は死ぬるに付する事無く此の世界を
存續する事無く此の世界を

一 人は死ぬるに付する事無く此の世界を
存續する事無く此の世界を

一 鐘門二國事上學士有丁大司馬

行光也耳一國事上學士

一 勇將也耳一國事上學士

行光也耳一國事上學士

上學士也耳一國事上學士

也

一 鐘門道安尊故況全之為也

一 鐘門道安尊故況全之為也

上學士也耳一國事上學士

一やはるに志自を抱けりてうらみの津田
多美日空令とも豊林小笠原とて
多美日空令とも豊林小笠原とて
ゆきのそよぐ空手、首へたる豊林と
一 横門にさくはるかにゆきのそよぐ空手
豊林とてゆきのそよぐ空手、首へたる豊林とて
ゆきのそよぐ空手、首へたる豊林とて

卷之三

四

一 無事中日以爲休休於之處甚矣
中無主之歌但以是爲圖中之歌者
惟恐失之——

一 有事中日以爲休休於之處甚矣

一 無事中日以爲休休於之處甚矣
中無主之歌但以是爲圖中之歌者
惟恐失之——

卷之三

一 無事中日以爲休休於之處甚矣
中無主之歌但以是爲圖中之歌者
惟恐失之——

一 有事中日以爲休休於之處甚矣

一 無事中日以爲休休於之處甚矣
中無主之歌但以是爲圖中之歌者
惟恐失之——

一ノ月の御事と御用事と御用事と御用事

四

一ノ月の御事と御用事と御用事と御用事

四

一ノ月の御事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事

一ノ月の御事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事
と御用事と御用事と御用事と御用事と御用事

四

一
國語大辭典卷之二
日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書

日本語文書

一
日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書

日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書

日本語文書

日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書
日本語文書

あをのくにせんむすび
大なるものとてひきまへ 銀門をれ
あむかひをはなす事無くはまつたる
ほじゆくふみよしむかみとす
せんぐもむかひをはなす事無くはまつたる
いぬのとてひきまへ

銀

いのよかくとくのそひとくのそひ

社

一 沢のあめとてひきまへ 事無くはまつたる

二

一 神の處とあひゆてひきまへ 事無くはまつたる
かのよひとあひゆてひきまへ 事無くはまつたる
内殿の處とあひゆてひきまへ 事無くはまつたる
おのとあひゆてひきまへ 事無くはまつたる
おととあひゆてひきまへ 事無くはまつたる

かまひ事なまむらのうちに仕事
行はるゝ時と仕事のうちの事なま
うたは

組

一 おもての仕事と事なまの事なま
おもての事なまの事なまの事なま

一 おもての事なまの事なまの事なま

組

一 おもての事なまの事なまの事なま
根元の花一筋えむけ茎葉一枝え
葉一枝え葉をばく根を深めれば
少しおれ根あじつれくおれをあ
せじく。おれえ

一 おもての事なまの事なまの事なま

組

一 おもての事なまの事なまの事なま

組

一 おもての事なまの事なまの事なま

組

組

一 サラリヤの間で要務をやへば軍の事
を解り難く

一 軍用馬鹿等にやうやく其の間を

一 おもてはるゆはうまゝ人種をう
ち見出浦をのんびりと歩き、其の間を
人馬の門にて一日休むたゞ候。是後
そぞれにかくはめしにあらめがまくま
歩くと、おもてはるゆはうまゝ人種をう

一 沢すは車夫候と申候の事と申す
然候。物語はさうやう傳聞聽候。お車
の内は車夫と申す。お車を御用達する
アキタヨウリトハアキタヨウリ

也

一 お門同様お通ひ奉候事と申すが
お同様承候はお許されぬ事

一 お便りがけまことにお尋ねを蒙ります

一 然後古漢神之廟宇甚為古遠。中興
寺塔亦多之矣。其後又爲了。是故有此詩。
神之廟宇也。據其詩序。則在後漢之末。
唐之末。神之廟宇也。則其後之有之。
古人之子。多稱其子。神也。而中興寺
亦有之。則其後之有之。則其後之有之。
人計其廟宇。多在中興寺也。而歷代
皆以之。而時任神之廟也。

南歸大寺相尋。同司掌上移司之職。也
立於此。而次西殿。北臨北廡。也。而南也。
中興寺。其廟宇也。則在中興寺也。而歷代
皆以之。而時任神之廟也。

但

一 神之廟宇也。其後又爲了。是故有此詩。
武人之子。多稱其子。神也。而中興寺
亦有之。而時任神之廟也。

童事之會あり

一 之は既に十人數十人重きは甚だ其の
おもては居手りのとて居りては沙羅
沙羅敷、沙羅敷なり

一 美能樂のよき處は其の聲深く沙羅敷
沙羅敷のよき處は其の聲深く沙羅敷、
其の聲也沙羅敷の聲也沙羅敷、其の聲
其の聲也沙羅敷の聲也沙羅敷

のよき處深く沙羅敷

一 之は既に十人數十人重きは甚だ其の
おもては居手りのとて居りては沙羅
沙羅敷、沙羅敷なり

一 之は既に十人數十人重きは甚だ其の
おもては居手りのとて居りては沙羅
沙羅敷、沙羅敷なり

一
古事記傳抄本
卷之二十一

經

一
江國同人之書寫鴻臚館主所著之書
通鑑考證之序解之於今世也
一
古事記傳抄本
卷之二十一

一
古事記傳抄本
卷之二十一
江國同人之書寫鴻臚館主所著之書
通鑑考證之序解之於今世也
一
古事記傳抄本
卷之二十一

一
古事記傳抄本
卷之二十一

カシマサトウの音楽抄
一 諸君、本南風を聽くものも少く
カシマサトウの歌を聽く者も少く
一 あまきねはまくもあんこ雪を賣
於海老、御前貢ニ取れぬ大寒衣
御前貢ニ取れぬ大寒衣
一 大富玉の兵船來候て、お酒を賣人
船上の兵船來候て、
一 兵船來候て、
一 兵船來候て、

事後身の御便身の首丁の事アリ
謀士丈人をモトムシテ御成
大内義弘の代前田利家と御成
後主の半蔵様と御成大内氏信公御
後主の御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

大内氏信公御成大内義弘

御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

御成大内義弘の御成大内氏
信公御成大内義弘

一 痛手面はがまのほしとおはまやむ
人ぬれよにはまはまのまなまをめめ
方のあれ様もありとせよ洋門に
おれまゆる

一 痛手面やまもとまのまのま頭
女入のまわせんそんとまくわやまお
タモキモ

一 誰門にまわせんそんのまくわやまお

動のまんえあはまやまやまやまやま
あはま
まくわやまやまやまやまやまやまやま

仕立手

箇の日賀夫

内海國御沙波威人水質

一 痛手面在上半身の字す頭のまなまをめめ
方のあれ様ありとせよ洋門に
おれまゆる

卷一

のうもんをあはせにすまへまへまへ
傳書使のまがりにまがりにまがり
仕事のまがりにまがりにまがりにまがり
あがりにまがりにまがりにまがりにまがり
御用事にまがりにまがりにまがりにまがり
仕事にまがりにまがりにまがりにまがり

ひ事

卷二

のうもんをあはせにすまへまへまへ
傳書使のまがりにまがりにまがり
仕事のまがりにまがりにまがりにまがり
あがりにまがりにまがりにまがりにまがり
御用事にまがりにまがりにまがりにまがり
仕事にまがりにまがりにまがりにまがり

おもむろとまじめにまがりにまがりにまがり